

## 退職に際して

人間生活学科 浦澤 正三

5年前に札幌医大を停年退職し、人間生活学部の大学院修士課程の特任教授として勤めさせていただきました。一言で言って、この5年間は本当に楽しく満足のいく5年間でした。65歳の停年以来の私の最大の関心事は、「自分の人生にどのように Schluss 決着をつけるか」ということであり、加えて、今までの「自分の専門領域にしか関心を持たなかった『専門馬鹿』はもう止めにして、余生は新しい楽しいことをしてみたい」ということでした。

その希望の通りに、改めて勉強しながら医学概論を教え、人間生活学演習では知的障害者と共にスポーツレクを楽しみ、福祉施設実習から帰ってきた学生らの悩み多かった実習現場での報告を聞き、同情しながらも少し意地悪な質問をしたり、大学院修士課程では一回毎に次はどういう講義をしようかと講義内容を考える楽しみを味わい、修士論文の「体験学習」に関する指導では「学習」の意味を学生と一緒にになって真剣に本を読んで考え、「性教育」の指導では初めて「ジェンダー」の意味を理解したりという具合で、このような楽しく有意義な日々を、しかも給料を頂きながら送らせて頂いたことを本当に有難く思っています。

真の「人間生活学部（又は学科）が存在し得るとすれば、それは諸科学の総合されたものでしょう。今の何倍もの異なる専門性を持った研究・教育者がいて、しかも彼ら・彼女らがそれぞれの専門性から踏み出して、互いに討論、協力して創り上げていくものだと思います。その意味では、「なお道遥か」と言わざるを得ない現状ですが、この方向で行くのか、それとも人間生活学科を（他の食物栄養、保育学科のように）少人数でカバーできる特定の専門領域に絞った学科として行くのか、私には現在がその分かれ目にあるように思えます。

最後に、楽しく有意義な日々を過ごさせて頂いた大学に、また、教員、職員の方々に心より感謝いたします。

## 広い心と真摯なご指導に感謝しつつ

浦澤先生は、5年間、大学院・学科双方で貴重な指導者でいらっしゃいました。長年にわたる専門領域で培われたと思われる先生の忍耐強く懇切丁寧な指導姿勢、旺盛な探求意欲は学生のみならず、われわれ教員をも常に鼓舞し続けて参りました。先生の健脚ぶりといつも微笑を絶やさないお顔も忘れがたいものがあります。一緒に過ごさせていただいたこの5年間で、人生の豊かな実りの季節に少しでも彩りを添えるものであったことを願って、感謝の言葉といたします。（阿部 包）